

初期ギリシア哲学に関する 古典中の古典

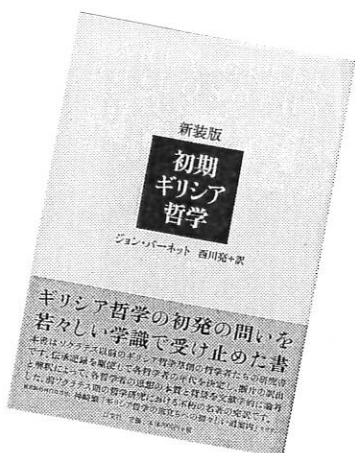
一冊の書物の内に過去の研究を網羅しつつくそうとする若々しい情熱

金山弥平

ジョン・バーネット 著
西川亮 訳

▶新装版 初期ギリシア哲学

10・15判 A5判572頁 本体7000円
以文社



本書は、ジョン・バーネットが一九二二年、二九歳の若さで世に問うた『初期ギリシア哲学』の第四版（一九三〇年）の邦訳である。西川亮氏による邦訳は一九七五年に出版されたが、約四〇年後、神崎繁氏によるあとがきを加えて、このたび新装版が出版された。西川氏による本書の単独訳は、まさしく偉業と称すべきものであるが、氏にその原動力を与えたのは、学者バーネットの凄さであった。バーネットには、他の研究書として、一九一四年の『ギリシア哲学』神沢愼一郎訳、一九五五年理想社、一九二八年の『プラトン哲学』（出隆、宮崎幸三訳、一九三五年学芸社、一九四一年河出書房、一九五二年岩波文庫）がある。とくに後者は、A・E・テイラーとともに提唱した「バーネット・テイラー説——『パイドン』や『パルメニデス』中のイデア論など、プラトン著作中でソクラテスが語っている諸思想は、ソクラテスの人の思想とみなすべきであるという立場——で有名である。しかしこの解釈は、ソクラテスとプラトンの関係、プラトン中期著作と後期著作の関係等について単純な二項対立図式を当てはめるものとして、今日では斥けられている。物事の白黒を明確につけようとするバーネットの姿勢は、本書でも「第三版のまえがき」の次の発言によく現わ

「初期ギリシア哲学」を扱う著作の登場について弁解する必要はまったくない。長いあいだこうした本が待たれてきた。というのも、二〇〇年の文献学上の進展は他に類を見ないものであるにもかかわらず、その結果は英語圏の読者には近づきうるものではなかったからである。私の最初の意図は、たんにこれらの結果を報告することであつた。しかしすべし、結果のいくつかに異論を唱えざるをえないことに気づき、はっきりとそう述べるのが最善であると思われた。これらの場合、その大多数はたぶん私の方が間違っているであろう。しかし私の間違いは、従来見過ごされてきた諸点に注意を促す点で有益であるかもしれない。バーネットの研究は、この発言のとおり、先行諸研究の成果を詳細に踏査して提示した上で、そこに自らの解釈を付け足し、新たな研究の土台、および研究進展のための叩き台を提供するものである。その点は彼が行なったテクストの校訂と注釈——プラトン『パイドン』二九二年、『エウテュフロン』、『ソクラテスの弁明』、『クリトン』一九二四年——にもよく表れている。両著作とも、古代ギリシアの文献と先行諸研究の広範な知識を駆使し、テクストの二つ二つに新たな研究の糸口となる注を付している点で、そこに含まれる「バーネ

「私の狙いは、初期のイオニアの教師たちの出現とともに、この世界にひとつの新しい事象——私たちがサイエンス（science）と呼んでいる事象が出現したこと……を示すことである。……サイエンスとは『世界（world）』をギリシア人の方法で考えることであると言えは、適切な表現である。そのためギリシアの影響下にあつた人びとのあいだにしかサイエンスが存在しなかつたのである。しかし、『サイエンス』とは何か、また『ギリシア人の方法』とは何か——問題はそれほど単純ではないのである。神崎氏のとがき『ギリシア哲学の旅立ちへの初々しい道案内』は、バーネット後の研究史も交えて問題の所在を非常に簡潔かつ的確にまとめてくれている。しかし批判されるべき点はある。本書が初期ギリシア哲学に関する古典中の古典であることは間違いない。現代の研究書の文献表に本書が挙げられることはめつたにないが、それは、本書が諸研究の土台となる空気のようなものであるからにはかならない。それは、バーネットが校訂したプラトン全集が文献表に現われないのに似ていると言えるかもしれない。

「第一版のまえがき」（第三版と第四版には含まれていない）で二九歳のバーネットは次のように語っていた。

「初期ギリシア哲学」の問題性を宙論に関心を寄せる科学者などを別にして、今日でも最高の注釈とみなしうる。神崎氏はあとがきで本書を「初々しい道案内」と呼んでいた。「初々しい」は、バーネットの解釈の一面的傾向をも暗示するのであるが、しかしまた、一冊の書物の内に過去の研究を網羅しつつくそうとする若々しい情熱をも示唆する。バーネットはこの「初々しい」を生渾持ち続けた学者であつた。西川氏の翻訳にもこのような「初々しい」が認められる。そしてここにも長所と短所の両方が共存している。本翻訳の初版からおよそ四〇年経過したその間、日本の古代哲学研究も進展し、初期ギリシア哲学の資料集に限つてもティールス&クラントツ『ソクラテス以前哲学者断片集』（岩波書店）や、カーク&レイウン&スコフィールド『ソクラテス以前の哲学者たち』（京都大学学術出版会）などが現われた。こうした成果を取り込むことなど、「初々しい」姿勢のままに本書が再登場したのには、いさか残念の感を否めない。一例を挙げれば、上述の「第三版のまえがき」からの引用において、「サイエンス」とした部分は、本書では「学問」と、また「世界」とした部分は、「あらゆること」と訳されていた。「サイエンス」の意味の広がりには、「学問」という訳語の採用も許容するであろうが、しかし、宇

宙論に関心を寄せる科学者として前六世紀の思想家を捉えようとするバーネットの姿勢は、「学問」と「あらゆること」という訳語では覆は隠されてしまふように思われる。バーネットが、初期ギリシア哲学に関する優れた先行研究を英語圏の読者が近づきうるものにしてしようとした試みは、西川氏も、若きバーネットが発掘した豊かな宝を日本に読者が近づきうるものにするための翻訳に心血を注がれた。神崎氏は、そのあとがきを「自分自身を取り巻く世界について、その成り立ちを考へながら、自分自身がどのように責任を現在および後代の他者に対して果たせるかというところを、議論を通して思考を廻らす」ということが、この書がまさに現在もわれわれに問いかけていることである」という洞察に満ちた言葉で結んでいる。例えば、原著ではギリシア語で与えられたテクストは、本翻訳でもそのままギリシア語で示されているが、もしも一般読者のためにギリシア語の日本語訳も併記するなど、西川氏の素直豊かな「若者」がさらに成長した姿を現われたならば、本書の「問いかける力」はさらに広汎で強力なものとなつたのではなからうか。西川氏の訳業は確かにその力を秘めているのである。

（名古屋大学文学研究科教授 金山弥平）